



金楽寺

学校通信 第11号

令和2年10月23日

尼崎市立金楽寺小学校

校長 中根 孝介

祝 金楽寺小学校 創立記念日



金楽寺小学校は、10月25日（日）創立記念日を迎えます。昭和10年（1935年）に小田第二尋常小学校（現在の長洲小学校）から分離して小田第四尋常小学校として現在の地に開校しました。翌年、尼崎市と小田村の合併もあり、校名を「尼崎市立金楽寺小学校」と改称します。その後、一時期、尼崎市立金楽寺国民学校と呼ばれることもありましたが、昭和10年の開校以来、今年で85周年を迎えることとなります。

児童数718名で開校した金楽寺小学校は、長年にわたり、地域の学校として子どもたちの学びの場として親しまれてきました。ひとえに85周年とは言いますが、その間、子どもたちの成長と喜び、それを育んだ家庭や地域に支えられてのことかと思えます。また、戦争や疎開を経るなど、多大なご苦労もあったことかと思えます。

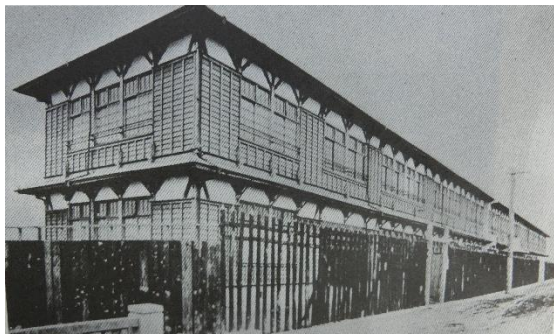
来客に「近くに『金楽寺』というお寺があるのですか。」と尋ねられることがあります。そんな時、こんな風にお答えしています。「今は、『金楽寺』というお寺はないようです。以前は、『きんらくじ』というお寺もあったようですが、今の字とは違う『金』という字を使っていたようです。」実際、調べてみると、もともと「金楽寺」は「錦楽寺」だったそうです。そしてこの「錦楽寺」の起源は、1300年も前の奈良時代にまでさかのぼります。

奈良時代、中国の優れた文化を学ぶために遣隋使、遣唐使が中国を訪れるようになります。当時、優れた学者であり、のちに政治家ともなった吉備真備（きびのまきび）が、遣唐使として717年に中国を訪れました。吉備真備は、様々な分野の新しい知識を習得し、735年に日本に戻りました。その時に唐（現在の中国）の土を錦（にしき：いろいろな色の絹糸で織った貴重な布）の袋に入れて持ち帰ってきたそうです。その土を長洲の地に持ってきて錦楽寺（きんらくじ）を建立したと言われています。貴重な錦の袋に入れて持ち帰ったことから『錦』という文字を使ったと思われる。

1790年代に刊行された9巻12冊からなる撰津の国の通俗地誌（観光案内書のようなもの）である『撰津名所図会』には、次のように書かれています。「吉備津祠 錦楽寺村にあり。もと吉備公の創し給う錦楽寺の旧跡なり。鎮守ばかり存して、この所の生土神とす。」とあります。「祠が錦楽寺村にあり、吉備真備公がつくられた錦楽寺のあとです。その土地と人々を守る神様です。」といった意味かと思われます。現在では、吉備彦神社東隣にある小さな祠が「錦楽寺」の唯一の名残と言われているようです。また、1930年の『大日本地誌大系25巻』には「彼地の埴土を取て錦の袋に入れ帰朝す。其土を設て是に置り、因て錦楽の號ありと云えり」とあります。彼地とは唐のことで、埴土とは粘土質の土で陶器の原料になる土のことです。「唐の土を錦の袋に入れて日本に持ち帰った。その土を置いて『錦楽』の地名となった」というような意味でしょうか。

吉備真備は、20年近く過ごし、多くのことを学んだ中国をあとにするにあたって、様々な思いを込めて、唐の土を非常に価値のある高価な錦の袋に入れて大切に持ち帰ったものと思われます。「錦楽寺」の名は、吉備真備のこうした強い想いが込められたものだとも考えられます。

この「錦楽寺」がいつのころからか「金楽寺」となったようです。明治前期の地図には、すでに「村寺楽金」と記されています。（『楽』は、楽の旧字体。当時、横書きは、右から読んでいました。）



【小田第四尋常小学校(長洲小学校 120年誌より)】

昭和10年の開校に向けて建築中であった小田第四尋常小学校の校舎は、昭和9年の小型台風で一度、全壊したそうです。その影響で完成が遅れたようで、10年8月25日ようやく落成しました。

9年は、その後、室戸台風も襲来し、当時、小田村の他の2校も校舎が倒壊したそうです。



【木造2階建ての校舎(昭和30年アルバムより)】



【全校朝会の様子(昭和30年のアルバムより)】



【昭和43年体育館完成(50周年記念誌より)】

なんか、今の体育館の様子とちがうような気がするけど・・・

あっ、1階のところがちがう！！

よく気がつきましたね。体育館の下は、はじめは柱だけで何にもなかったんですね。体育館下に校長室や職員室、保健室、理科室などができたのは、2年後の昭和45年です。